

---

# 絆

エスカンティア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
絆

【Nコード】  
N1586J

【作者名】  
エスカンティア

【あらすじ】  
失踪した両親を探す双子の兄妹。  
ふたりに同行する召使。

両親は一体どこにいるのか。  
幼い兄妹の旅が、いま始まる。

## 序章（前書き）

これはドラクエ？のファンフィクションです。

本編では語られていない、主人公の石化から親子の再会までの間を創作しています。

なお、名前は自分のものを使っています。

ちなみに花嫁はビアンカです。

注意：主人公は王族なので、王族らしくフルネームを考えました。  
そのため登場人物には全員名字があります。

## 序章

東の大国グランバニアに、元気な王子が生まれた。王子は二ニギと名付けられ、城の誰からも愛された。

しかし母の王妃マーサは出産後に失踪し、間もなく父王パパスは息子を連れ妻の搜索に向かった。

それから長く一家の行方は知れなかった。

一家が失踪して二十年。グランバニアの国に若い夫婦が訪れた。

夫のほうは、年のころは二十歳ほどだろうか。銀製の鎧、鉄製の仮面を身につけ、背には細身の剣を背負っている。腰まである長い黒髪を無造作に束ねた、なかなか屈強そうな青年である。

妻のほうは、夫と同年ぐらいに見える。薄桃色のローブを羽織り、白銀のヴェールを被っている。長い金髪を三つ編みにした、澄んだ青い瞳が印象的な美人だ。

最初に夫婦に会ったのは、城外の小さな家で暮らすサンチョ・キンバリーだった。彼は失踪した先王とともに旅だったが、留守番中に主の死を知り、グランバニアに戻ってきていたのだった。

初め彼は、青年が何者なのか分からなかった。しかし青年の名

彼は二ニギ・ランバートと名乗った。と、彼が背に負う剣で、彼がかつての主だと気付いたのだ。そして彼のそばにいたのは、昔アルカパの町で宿屋を開いていたダンカンの娘、旧姓ビアンカ・ハートレイだった。

すぐサンチョは、ふたりを連れ国王オジロンのもとに参上した。

二ニギの持つ剣を見たオジロンは、彼が亡き兄の一人息子だと分かった。そして彼の妻、ビアンカの胎内には新しい命が宿っていることが判明。オジロンは、死んだと思っていた甥の生還と新しい命の誕生に狂喜乱舞し、翌日には彼に王位を譲ることを決定した。

だが王家の仕来たりに従わなくてはならないという大臣の進言もあり、二ニギは試練の洞窟まで王家の証を取りに行くこととなった。途中で邪魔も入ったが、彼は何とか無事戻ることができた。そして彼が城に戻ってすぐ、ビアンカは男女の双子を出産した。

子どもたちはふたりとも、ビアンカの外見を受け継いでいた。二ニギは男の子にはアドニス・ウィル・グランバニアと、女の子にはアイネ・リーア・グランバニアと名付けた。

数日後、二ニギの戴冠式が盛大に行われた。彼はこの場で、正式な本名である二ニギ・ウィル・グランバニアと改名した。

その夜のことだった……。

唐突に目を覚ました彼は、場内が静まり返っていることに気がついた。いくら夜とはいえ、こんなにも静まり返るものだろうか。

ふと、胸騒ぎを感じ、二ニギは急ぎ妻のもとへ向かった。しかし室内にいたのは、乳母と子どもたちのみ。ビアンカの姿はなかった。翌朝、緊急会議が開かれた。乳母のエレノアの証言からビアンカは魔物に連れ去られたらしい。だが魔物とはいえそう遠くには行けまい。宰相となったオジロンは、急ぎ一帯に捜索隊を出した。

当然のように二ニギも捜索に向かおうとした。が、サンチヨに反対された。国王たる二ニギに万一のことがあつてはならないと。だが、父パスの遺した天空の剣が輝き、サンチヨはこの剣に宿るパスの魂が、必ずやグランバニアを守ると悟り、生還を約束して二ニギを送り出した。

二ニギは相棒のキラーパンサー、アンドレや仲間の魔物たちとともに、直観に従って北へ向かった。たどりついた先は、デモンズタワー。ここから、ビアンカの気配がしていた。

最上階の最奥に、捕えられたビアンカがいた。彼女の背後には、ビアンカを連れ去った魔物　ジャミがいた。

バリアに阻まれ、ニニギたちはジャミを攻撃できなかった。だがビアンカの悲鳴がバリアを解いた。ニニギは妻の助けにより、見事ジャミを征伐した。だが。

真の黒幕は、勇者が生まれるのを阻もうとしたゲマだった。ゲマはビアンカが、天空の血をひく勇者の子孫だといい、ビアンカの子が勇者となるといった。そのため、ニニギとビアンカは石にされてしまったのだ。

ニニギはオークションにかけられ、小島に住む大富豪に買い取られた。ビアンカは悪徳商人によってどこかへ連れて行かれてしまった。

一方、ふたりの子供たちは、すくすくと成長していた。アドニスには父によく似た勇氣、アイネは母によく似た優しさを持っていた。

四歳になったある日、ふたりは唐突に、両親がいないことに気付いた。サンチヨを問い詰めると、両親は魔物の手に落ち行方不明だと聞かされた。またアイネは、小鳥たちに両親が石にされたと聞かされた。

アドニスとアイネは、両親を捜しに行くことにした。しかしサンチヨや宰相、いとこおばのドリスに、幼すぎると猛反対された。せめて五つを迎えるまで待てと。

だが父と同じく、勇氣旺盛な双子である。ある晩ふたりは、こっそり城を抜け出した。アドニスは、練兵場から皮製の鎧、帽子、盾、鋼の剣を、アイネは調理場やタンスから、絹のエプロン、鍋の蓋、ヘアバンド、果物ナイフを持ち出した。またふたりとも、薬草を大量に手に入れた。しかし城からほんの数メートル行ったところで、魔物に襲われ絶体絶命の窮地に陥った。

幸いにもサンチヨや兵士たちが駆け付け、ふたりは助かった。だがこっぴどく叱られ、自分たちがまだ力不足で、とてもではないが

魔物には対抗できないことを知った。そのため、五つになるまで待ち、その間は体力づくりや魔法の勉強をすることを約束した。

そして約束の五つの誕生日。ふたりはサンチョとともに、両親を探す旅に出たのだった。

## 一章

「このあたりに何があるかって？ うーんそうだねえ、もうちよつと行ったら島があるんだ。そこに変わり者の王様がいるって噂を聞いたよ」

宿屋の女主人はからからと笑った。

グランバニア城を出発して十日。アドニスたちはネツドの宿屋にいた。ちなみにここでは、いまだに宿泊キャンペーンをやっている。まさか両親が訪れた時からやっているとは思っていない。

「どうする、お兄ちゃん」

「僕会ってみたいなあ。ねえサンチヨ、行こうよ」

「まあまあ、で、ご婦人、その王様は、どう変わってらっしゃるんでしょう？」

双子を諫めながらサンチヨは尋ねる。だが女主人はよく知らないと首を振るだけだった。

「いかがいたしましたよう。行ってみますか？ 幸いこの老いばれも、お父上のお船は操縦できますぞ」

「行く！！」

さて、説明しておくが、その変わり者の王様というのは、ほかならぬメダル王である。

財宝には目もくれず小さなメダルばかり愛でるという点が変わっているのだ。

そして当たり前だが、アドニスたちは小さなメダルを持っていない。よって「見つけたらまた持つてくるがよい」と言われ、やんわりと追いつ返されてしまったのだった。

「もう少し西に行けば、砂漠の島がありますよ。そこには城があっ



て、世にも不思議な力を持つ女王様がいらつしやるとか」

メダル型チョコを売る宿屋の主人が、それはそれは耳寄りな情報を教えてくれたのだ。

「世には不思議な力、か。どんな力なんだろう！」

「わたし、会ってみたい。ね、サンチヨのおじさん連れてって」

「ええ、ええ。行きましような」

砂漠の国、テルパドル。

かつてニギとビアンカが、天空の兜を見つけた国である。

あの日夫妻が助けた旅の道具屋は、すっかりテルパドルが気に入りにまだに滞在している。

「アイシス様にお会いしたいの？ いいわよ、案内するわ」

出迎えの女性が三人を玉座まで連れて行ってくれた。

## 二章

テルパドール女王アイシス・・・彼女を一目見たアイネは、あまりの美しさに息をのんだ。彼女の母も美人だったという。事実サンチヨやオジロンの証言で画家に描かせた肖像画には、それはもう美しい妙齡の女性が描かれている。だがアイシスには、母とは違う美しさがあった。

肩の辺りでまっすぐ切りそろえた黒髪は、遠目に見ても艶々としている。優しくアイネ達を見つめる瞳は、穏やかでありながら強い光を放っている。薄絹を幾重にも重ねた衣装が、うっとりするほど似合っている。

「まあ、行方不明のご両親を探して旅を？ それはそれは大変な事です  
ですね」

アドニスとアイネの頭を撫でたアイシスは、サンチヨの話を聞いてため息をついた。他言されてはいないが、彼女は両親を早くに亡くしている。前女王だった母フィオナはアイシスを産んですぐ亡くなり、宰相だった父アルバートも彼女が七つの年に病気で亡くなった。現在二十八歳、そろそろ結婚しても良い年頃だが、なかなか相手が見つからず周囲は困り果てている。

「それにしても、あなたたちはどこかでお会いしたような・・・」  
アイシスは呟いた。当然だ。アドニスとアイネは、かつてこの城を訪れたニニギとビアンカの子供なのだから。

「五年か六年ほど前でしたか、勇者様の御遺品を見せてほしいと仰った人のご夫婦ではありませんか？ 確か・・・ニニギ様とビアンカ様」

「そうよ！ あのふたりに似ているわ。じゃああなたたちは、あのご夫妻のお子様方なのですね」

「お父さんとお母さんを、知っているんですか？」

思わずアイネは尋ねた。テルパドールにも両親は来ていたのだ。

「あの、そのときお父さんとお母さん、どこから来たか言っていましたか？」

さあ、言っていたかしらねえ。

そう言うようにアイシスはため息をついた。ああでも、と呟く。

「確か・・・船を手に入れたばかりだと仰っていましたよ。だから、港のある町からいらしたのではないでしょうかしら」

「港・・・」

旅立つ前の一年で培った知識から、港町を手繰りだす。港がある町は。

「・・・ポートセルミと、ビスタ港と、あとは・・・」

「サラボナには、船を持つて大金持ちがいるし、その大金持ちはカジノ船を持つて。きつとそのうちのどこから、お父さんとお母さんは来たんだよ」

口ごもった妹の言葉をアドニスが続ける。確かにそのうちのどこか、あるいは全て。旅をしていた両親ならば、全ての町を回っていてもおかしくない。

「遠くまで行くのならば良いものをあげましょう」

ふいにアイシスは口を開き、アドニスとアイネを呼び寄せた。そしてふたりの手に、大きな包みを乗せた。アドニスが開けてみると、中には大量の道具　薬草、毒消草、満月草、聖水、キメラの翼、そして店では買えない魔法の聖水とエルフの飲み薬が入っていた。

「これだけあれば、きつと足りるでしょう。必要なくなったら売って資金にしてください。あとは・・・」

まずアイシスは、アドニスの頭に手を乗せた。

「あなたには、どんな闇にも負けない勇気を授けましょう。そして・・・」

次にアイネの頭に手を乗せる。

「あなたには、どんな闇にも負けない知識を授けましょう」

ふわあ、と、ふたりの脳裏に光があふれた。アドニスは己の肉体に勇気が、アイネは己の心に知識があふれてくるのを感じた。

「サンチヨ殿、ニニギ様とビアンカ様のお子様方を、守ってあげてください」

「御意」

翌朝、三人は最も近いポートセルミに向けて旅立った。

### 三章

ポートセルミの町には、モンスター爺さんがいる。もちろん、かつてニニギが専属契約した老人である。

「何？ あのニニギの子供？ おうおう、お前さんたちはニニギにそっくりだ」

両親の名を告げると、モンスター爺さんは嬉しそうに目を細めながら双子の頭を撫でた。アイシスと言い、テルパドールの侍女と言い、どうやら両親、というよりニニギはかなり人望があるらしい。

「どうじゃ、お前さんたちの父親の従えたモンスターたちに会って行くか」

「「会えるの！？」」

それは嬉しい。父の従えたモンスターはグランバニア城にもいるが、もっとたくさんいると聞いていた。是非とも会いたい。

「ねえお兄ちゃん、あれはブラウニーのブラウンだね。あれはプリズニヤンのプリズンで、こっちはさまようよろいのサイモン」

「アイネはよく知ってるんだね。ぼくなんて全然分かんないや」

「でもお兄ちゃんはいろんなこと知ってるでしょ？」

「モンスターのこと知ってるほうがいいや。それにアイネは呪文もいっぱい知ってるしさ」

「お兄ちゃんだって、マホトーンは使えるでしょ。それに何より、お兄ちゃんはお父さんが残して行った天空の剣を装備できるじゃない」

ほほえましい兄妹の会話を、サンチヨは嬉しそうに見つめる。幼少時のニニギも、こんな風にほほえましくピアンカと話していたものだ。

「ささ、アドニス様、アイネ様、そろそろ宿に泊まりましょう。もう夕方ですよ」

「やだ！ もつとモンスターたちとお話するの！！」  
ふたりはそろって答えた。だがサンチヨも、長年の子守経験で手慣れている。

「モンスターたちは逃げませんよ。もうしばらくポートセルミには滞在するのですから、明日また会いに参りましょう」

それにモンスターたちも疲れているようですよ。

物心つく前からそばにいるサンチヨに言われては引き下がれないふたりは渋々宿屋に向かった。その際アイネはもつといたいと駄々をこねたが、大好きな兄に諭されその場を離れた。

その夜、ふとアドニスを目を覚ました。左隣を見ると、サンチヨは大きないびきをかきながら眠っている。だが右にいるはずの妹の姿がない。

「アイネ・・・？」

呼びかけるが、返事がない。念のためアドニスは剣を背負い、妹を探しに向かった。

アイネは教会の側で泣いていた。恐ろしい夢を見て、思わず両親にすがろうと飛び出してきたのだ。だがもちろん両親はいない。悲しくなった彼女は、泣き出してしまったのだ。

「アイネ！ こんなところにいたのか？」

背後から兄に声をかけられ、アイネは目を真っ赤に腫らして振り向いた。

「おに・・・ちゃ・・・。お兄ちゃん！！」

大好きな兄の姿を見て気が緩んだのだろう、アイネは兄にすがりつき声をあげて泣き出した。

「怖い夢見たの、だからお父さんとお母さんに会いたかったの。でもないから悲しかったの・・・っ！」

「大丈夫だよ。お兄ちゃんがいるだろ。怖い夢見たらお兄ちゃんのところにおいで。いくらでも泣けばいいから。な？」

アドニス<sup>1</sup>は泣きわめく妹の背を軽くたたきながら、何度も何度も諭<sup>2</sup>していた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1586j/>

---

絆

2010年10月8日12時07分発行